



韃靼勝敗記

一

184

~ 13
4047
1



門 へ 13
続 4047
巻 1

詩を声阿多如畫画の象
安子の詩も如文と世なり
實ふ如多の詩乃事い
なるもの乃事い如画を
阿ハ世禮と礼上よ事里乃



二四五

海外路卷説

韃靼勝敗記

墨堤舎梓

分類 D63
省号 12
通番 345



遠くは綿の象と考へたり
祝聴りこゝに世文は是れ
其もく昇平の久しと
民人枕をきこひて腹は痛
干戈の久しき故に世にきこむ

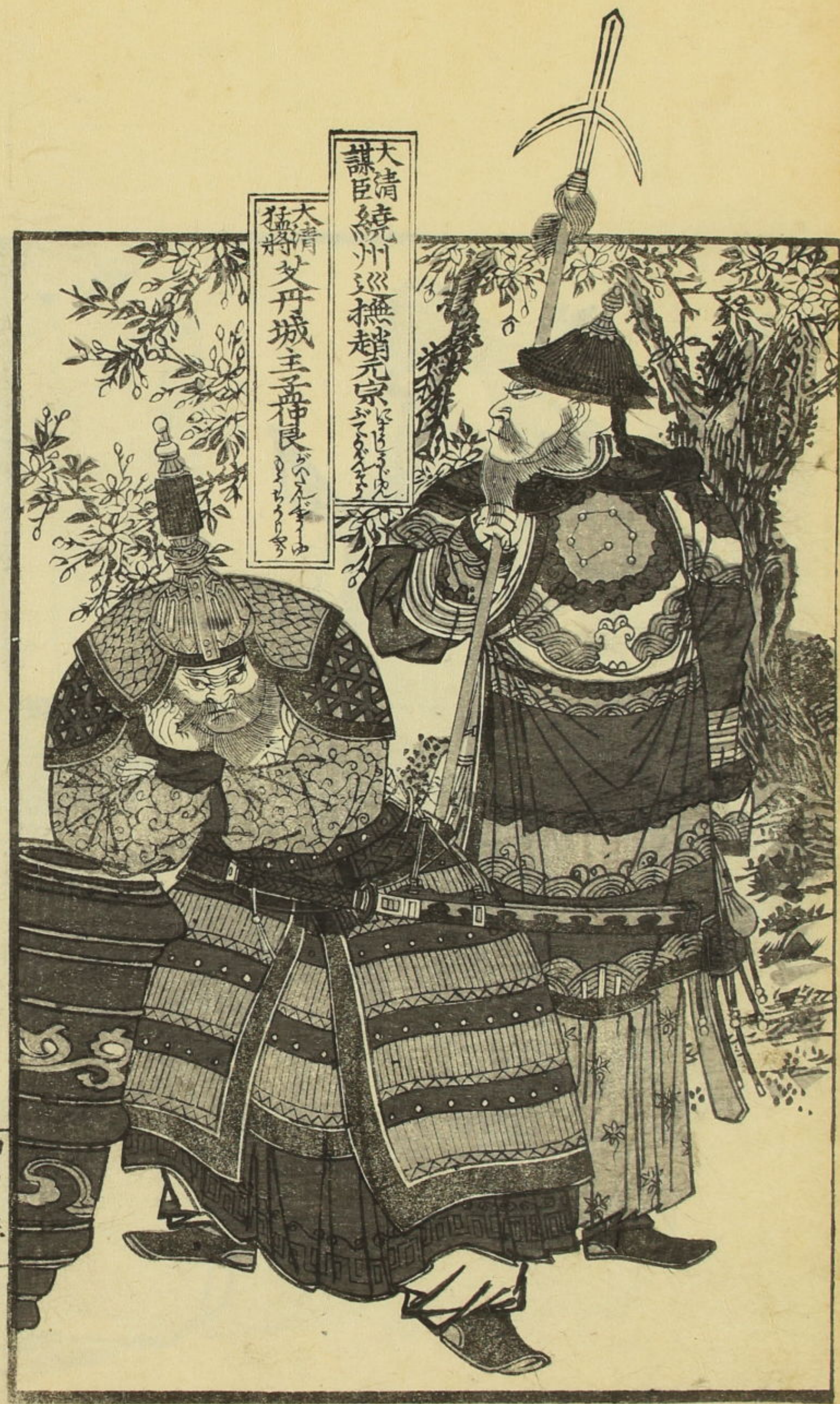
口ノ讀

あゝ世の事は是れ此の種を
久しき吾も此れ治世の志
思ひんを世に修む
吾も其職を修む
此れ世に修む





大清
 智勇將 黑龍城主 同馬翼
 同夫人 幹氏



大清
 謀臣 繞州 巡撫 趙元宗
 大清
 猛將 艾丹 城主 孟得良



韃靼英雄烏斯坦

喇嘛勇臣火單

火單嫡子單殺得



喇嘛奸臣墨兒蘭

四一〇

韃靼勝敗記惣目録

卷之一

韃靼地名の事

喀爾喀城中浮定の事

韃靼勢至新威と攻る事

司馬翼智計韃靼勢と川中に溺る事

卷之二

喀爾喀王麻辣拔思と招く事

麻辣拔思喀爾喀王の陣よ来る事

黑龍江城の事

黑龍江城中多珍の酒宴の事

艾丹城攻め系勢後傳の事
羅金德韃の陣よ夜討とる敗軍の事

卷之三

艾丹城の事

吾仲良血戦討死の事

北京英吉利へ加勢と乞ふ事

趙元宗南京と攻る事

英吉利勢黄河にふ来る事

李伯玉英國の軍艦と奪ふ事

卷之四

孝氏^リ後^とと^けけ^く山西^の勢^とと^悩悩^{する}
 後^の明^の勢^を討^つつ^る清^の大^の軍^とと^悩悩^{する}
 英^の右^の利^を奪^つつ^る敗^軍の^事
 大^の孝^の友^を全^く復^す讐^のの^事
 累^に見^る蘭^の大^の軍^とと^欺欺^つつ^るの^事

卷之五

一 單^の毅^得款^討討^す并^小字^古古^の境^落落^の事^事
 一 鳳^凰山^の麓^にて^難清^討討^の事^事
 一 大^清の^陣中^にに^單毅^得款^討討^の事^事
 一 難^艱喀^爾喀^爾王^後明^小一^味合^伴の^事

目錄終

大清道光三十年十月廿八日 穆 阿 二 臣 論

任賢去邪人君之首務也去邪不斷則任賢不專方
 今天下因循墮廢可謂極矣蓋治月壞人心日澆是
 朕之過然獻可替否匡朕不逮則二大臣之職也穆
 彰阿身任大學士受累朝知遇之恩不思共難共慎
 同心乃保位貪榮妨賢病國小忠小信陰柔以售其
 奸偽學偽才揣摩以逢王意從前夷務之興穆彰阿
 傾排異己殊堪痛恨如達洪河姚瑩之盡忠有礙於

已必欲隱之者英之無耻喪良同惡相濟盡力合心
似此固寵竊權者不可枚舉我

皇考大公至正惟全以誠心待人穆彰阿何以肆行
無忌若使

聖朝早燭其奸則必立置重典斷不姑容穆彰阿特
恩益縱始終不悛自本年正月朕親政之初遇事摸

稜鐵口不言迨數月後則漸施其伎倆如嘆夷船至
天津初猶欲引著英為腹心以遂其謀欲使天下群

黎蠶食荼毒其心陰險寔不可圖潘世恩等保林則

徐則屢言林則徐柔弱病軀不堪錄用及朕派林則
徐馳赴粵西剿辦土匪穆彰阿又屢言林則徐未

能去否偽言熒惑使朕不知外事其罪寔在于此至
若著英自外生成畏蕙无能殊堪託異前在廣東時

惟抑民以奉夷人罔顧國家如進城之說非明驗乎
上乘天道下逆人情幾致變生不測賴我

皇考燭悉其偽速令來京然不即于罪斥亦必有待

也今年著英召對時數言嘆夷如何可畏如何應度
周旋欺朕不知其奸欲常保祿位是以喪盡天良愈
辨愈彰直同狂吠尤不足惜穆彰阿暗而難知者英
頭而易著然而貽害國家厥咎維均若不立申國法
何以肅紀綱而正人心又何以使朕不負
皇考付託之重歟弟念穆彰阿三朝舊臣若一旦置
之重治朕心定有不忍着從寬革職永不祿用者英
雖无能已極然究屬迫于時勢亦着從寬降為五品

頂戴以六部員外郎候補至伊二人以私欺上殫天
下所共見者朕不為已甚姑不深問弁理此事朕熟
深慮計之久矣不得已之苦衷余諸臣其共諒之嗣
後京外大小文武各官務當激發天良公忠佐國俾
平素因循取巧之積習一旦悚然即悔毋良難毋苟
安凡有益于國計民生之大端者直陳勿隱毋得仍
顧師生之誼援引之恩守正不阿靖共余位朕寔有
厚望焉布告中外咸使知朕之意特諭

右ノ如ク北京ノ新帝即位ノ肇メ奸臣ヲ論シ
 叙爵ヲ換ヘ國政ニ震襟ヲ碎キ玉ヘ一治一
 乱ハ天ノ定數ニシテ何ゾ人カノ及グ處ニア
 ラズ聰明英主ト虽ドモ是ヲ免ガレサルハ古
 今相同ジ咸豊爺ノ賢ナルハ此勅書ヲ以テ推
 テ知ベシ

墨堤舍敬白

韃靼勝敗記卷之一

○韃靼地名の事

柞大韃靼と云ハ中北亞細亞の総名にして其部内數十
 部小部と皇國ニ屬するあり支那ニ屬するあり魯西
 亞ニ屬するあり又独立韃靼と名付して支那及び魯西亞
 に屬せざるの國七ツあり其内其ノ數部小部にして其ノ國王
 あり魯西亞韃靼部ニ屬する其ノ國王は支那に屬する韃
 靼と名付し其ノ國王は支那に屬する魯西亞
 連一名哈刺土部なり是と指して支那韃靼と云人皆漢種あり
 てるよ長孫と使ふ其國王と名付して大汗と云その中に

後あり東岳純は界の雅克薩滿小の林中に
大府あり夷一遼東と云者二有林牙之と号柱支加爾と云
右清言征夷新貴薩成をけは海あり古増小降遊ありと
咸也一初は僅小百又十人そ鳳凰山小を奉て後中
と一統一都と少多は建てより久く平打傍に小今
咸豊帝の時より清の王威喪へ上りその擽るなく安
る義と都一仁政と都て虚政と都約一六天の志
志と都一義と都慕るは洪武純りや素伯王
ととて致十方の軍兵あり手り並ちと

三ノ一

押す南京府と攻えけし都と一幸号と天徳とて
風俗衣服も先朝小復一都仁政と都一武威と隣法四
又赫とその法と慕るは都下小弛集る者算ありといと
ありは是小依る内地十八省の都の法候より北多
るは都の齒と換よりも都一帝と始也欽差法大臣
の都を軍儀評定匿るは都一海あり一都府遼東王
都打洲来一都都組の内喀爾喀王
都と攻るの也と依へり

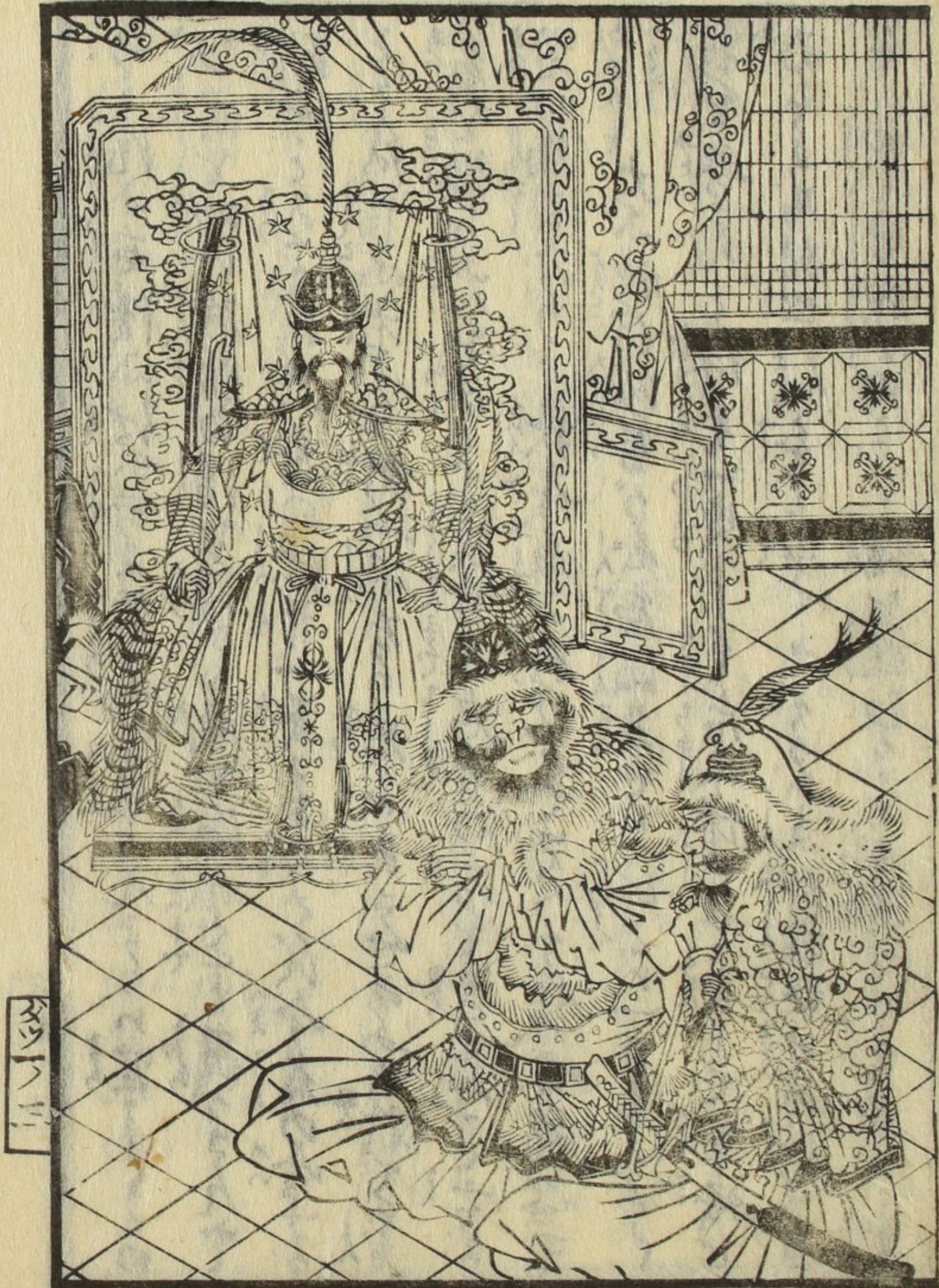
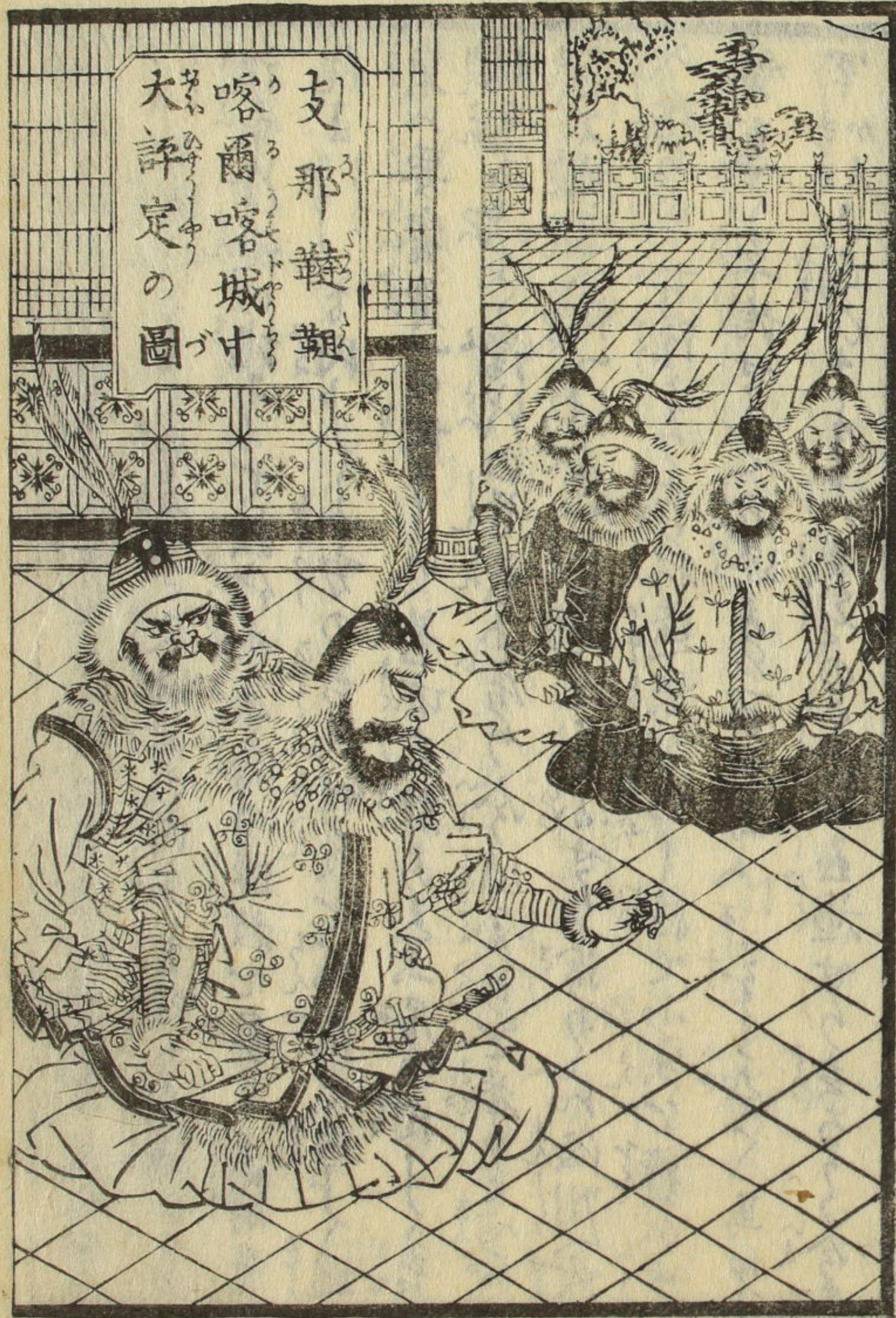
○都都勢を都と攻る

喀爾喀王とて都代を清小属一連綿は小を兼ち

清の苛政小国弱せしとけ以中華小強乱ありて深後
 禁これに困倦く困窮一老と譽ふ初と名しむは漸く
 壯者の家業と棄て他を乞り老弱の憐死するふありて
 う能く喀喇喀王 大不嗟嘆一咸豊二年辛亥の
 冬我後役の位を集めてお強しと曰我必の累代を清乃
 旗に小属せしと黄とて今清の苛政小国弱一既小下民
 憊死と免まざるに及び君君とるに位はくらの古賢の戒め
 て武王討と討ども及運の名は仁と賊ふ者と一吏とらふ
 一吏討と征とと却とく英名と後世はまを我が家元よりを
 清の三代相愛の主人ふありて時世よりて孫不侯する

卷二二

のと清小を清小は共又悪名を悪うんよりい置くこの
 一氏とゆけ孫賊の清と討と威と海印とも妻がさんせ
 歌をともあれ一屋の徳一養も及むん今君の命する
 とく孫君未元より形おあり思名をさせあふたれん
 名を抛ちちちとて後世と忠君の名をきさんとしる
 者の面目なりと歌表表又形うとて思之れは喀喇喀王
 考を母さんと孫養一皮しそ后又諸君と名して軍後と
 みる馬兒空ををて安くやうの支那難難中の清は屬
 する心く皆我皇のてく清と怒むるを安せりまありて



龍城りゆうじょうの北きた陽やう禦ご身み一の要よう地ちを北きた京きやう陽やう代だいの守まもり司し馬ば翼よく
 一いつと城じやう代だいとして居まゐる又または海うみの内うち寧ねい古こ塔たつの守まもり
 從そつ帝てい津つ邊へんの地ちありて教かう代だい小せう京きやう帝ていの連れん枝しと盡おく南なん時じ
 親おん王わうも同どう下かく小せう方ほうの昔むかし礼らい地ちを結むすば同どうく遠えん
 東とうの要よう害がい身み一の地ちとして是こゝ亦また王わう族しやくあり居まゐり同どうく古こ
 林りん是こゝ不ふ治ちぐ後ご代だいの昔むかし不ふ居まゐり今いまけと昔むかしと奉ほうりて
 此こゝ北きた邊へん海うみへ付つくと是こゝ向むかへて居まゐり我われあは海うみ州しゆうへ攻こう
 入い始はじめめ寧ねい古こ塔たつより古こ林りん遠えん東とうとて一いつ徳とくで小せう京きやうと護ごの中ちゆう
 華か急きゆうく平へい肉にくせんとお速すみまの百ひやく里り西せいへるを今いまも古こく馬ば翼よく
 軍かみかんふ向むかひ中ちゆうに居まゐるは是こゝの守まもり玉ぎよく極ごくせり去さらう今いまも

中ちゆうより通とほり黑くろ龍りゆう城じやう由ゆ時じの城じやう代だい司し馬ば翼よくの北きた京きやう陽やう代だい勇ゆう
 二ふたの人ひとあり我われ軍かみ勢せい先せんは海うみあり付つんとして是こゝ城じやう代だいより
 後ご結むすせの味あじ方ほう難なんをせんとお速すみまの喀か喃なん喀か王わうは是こゝを
 て後ご編へん皆みな終しゆうりして先せんは是こゝ黒くろ龍りゆう城じやうと攻こうめり去さらう今いまの地ち
 衆しゆう國こくして雪ゆき降ふり今いま急きゆうな軍かみと出でるは成せい雅やをれが督とくく暖ぬ
 和わの和わと結むすく軍かみと出でるべしと評ひやう定てい一いつ皮かわして出で陣ちんの用よう
 意いとる一いつくも先せん法ぽう矣やより中ちゆうに成せい豊ほう二ふた年ねん四し月げつ上じやう旬じゆん
 激げき文ぶんと作つくり難なん祖そ列れつ玉ぎよくの諸しよ侯こうへ是こゝ新しん征せい討たうの旨あやと解かいり
 一いつに法ぽう皇わう嗶ひ喇ら嘛まらまは門もん流りゆうの徳とく勢せいと率そつく一いつ度たふに北きた
 加かり是こゝと攻こうり列れつ國こくの北きた京きやう陽やう代だい守まもり是こゝに是こゝを既いめり

喀喃喀王 軍勢 五万餘騎 して加兒川原を押し出し
一隊 合体の諸軍 我若らと 砲集り 軍威 日に盛に
戦ひて 多くの軍勢を 潰し 倒山 破海の勢 ありて 軍勢 城
とさして 押寄せんとす ける 軍勢 城 不支 へん れば 城代 司
翼 といふ 世 又 少 中の 大 勇 別 の ね ち ぎ び 廿一 も 獲 け ぬ べ
これ とも 先 ける 北 条 へ 来る とい 併 へ 並 車 ち 不 防 禦 の 用 意
と ありて 日 と 経 ぬ 難 勢 軍 勢 城 へ と 押 寄せ 司 馬 翼 とい
半 途 不 勢 とい け 出 して 軍 へ 戦 小 既 不 支 勢 あり 付 と 經 ぬ
鉄 炮 打 掛 砲 煙 の あり 納 る ざ り 又 子 牙 あり 上 日 長 槍 とい
うち づ り 殺 十 合 ありて 獲 取 ぬ ざ れ ども 日 已 不 支 不 及 入

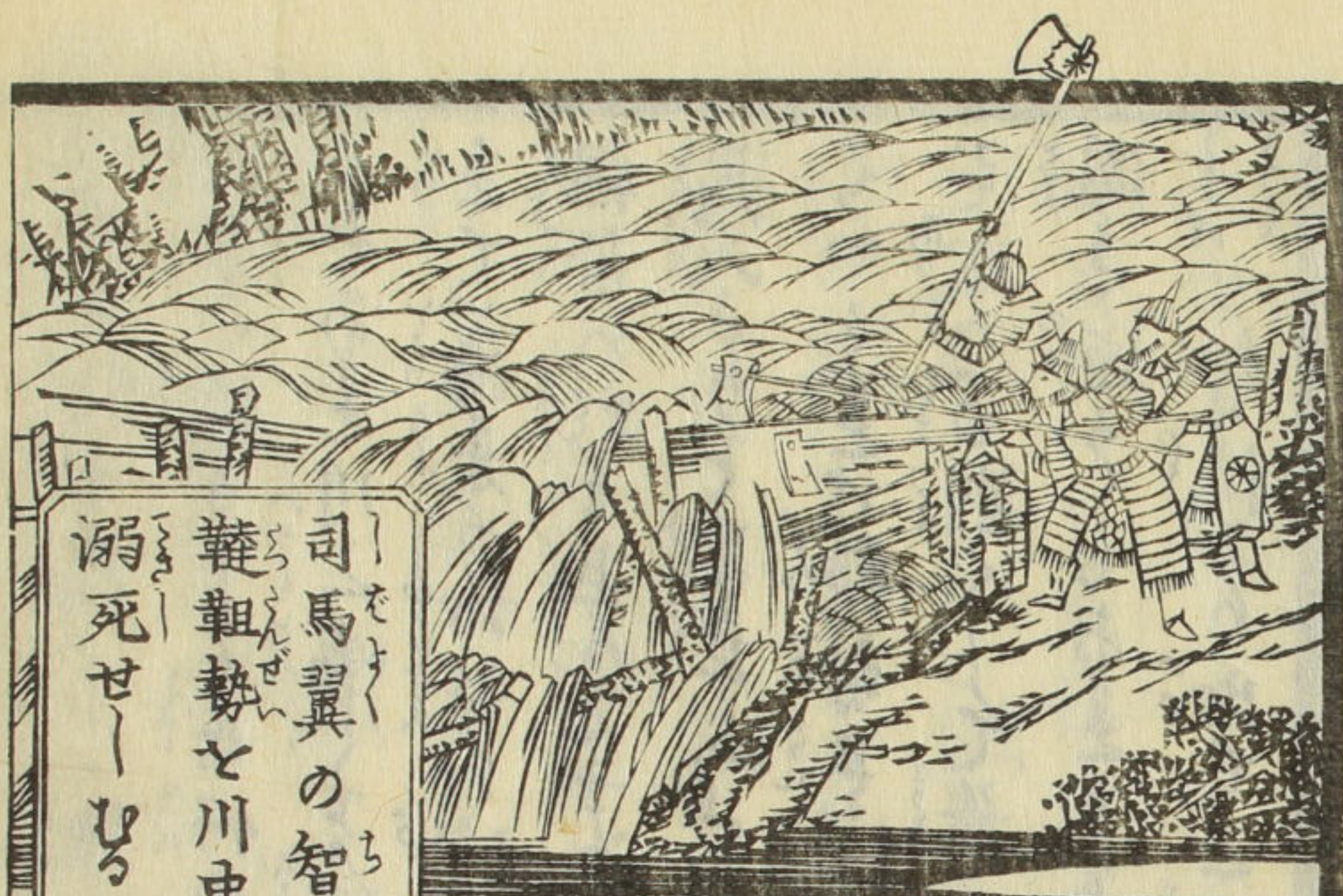
で 双方 勢 引 揚 げ 難 勢 日 日 とも 増 加 する 獲 威 とい
と とも 異 ども 黒 龍 の 城 代 司 馬 翼 とい 乞 素 勇 別 遣 して 孫
小 軍 勢 あり たり とも 異 ども 女 とも 懼 る とも あり 防 敵 あり たり
な とも 異 ども 一 つ 果 べ き たり とも 異 ども 喀 喃 喀 王 とい 噴 射
喇 嘛 とい とも 異 ども 軍 勢 とも 異 ども 砲 集 る 二 方 不 支 して 一 時
う 攻 落 さん とも 押 寄せ たり 城 代 司 馬 翼 とい 捷 速 とい 二 方 共 二 途 二
討 とも 出 あり たり 実 戦 あり とも 大 多 とも 向 へ 難 勢 軍 勢
とも 異 ども 強 之 切 とも 異 ども 城 代 司 馬 翼 とい 難 く とも あり たり 討 死
とも 異 ども 元 日 度 あり とも 異 ども 難 勢 軍 勢 とも 異 ども 勢
とも 異 ども 大 多 とも 異 ども 討 死 とも 異 ども 城 中 二 討 入

島を奪はれしと探死打振返らうて一ツの廣野に馳出て
程もをまんとしてる所は城方の別名葛刺新と名をて
て殺し殺し小殺ふこの際小隊各々しく侍へと立並し
後と往と戦へば難勢も踏ましく切をさしり小隊を
所をさしり尺地もあうく先向りけし時城各の後隊より
西洋流の天槍は強業とて天槍も裂るるなりよお出と其
玉を中と鳴きさし飛来りて廣野の中は落るとあし
ひとりの地雷大堆中より横發し大勢二二三丁に飛布て
難勢はふるはと焼まきやく雨も大堆の後ろくや又
一ヶ所の地雷大堆發を振りと虽ども死と願りし難勢

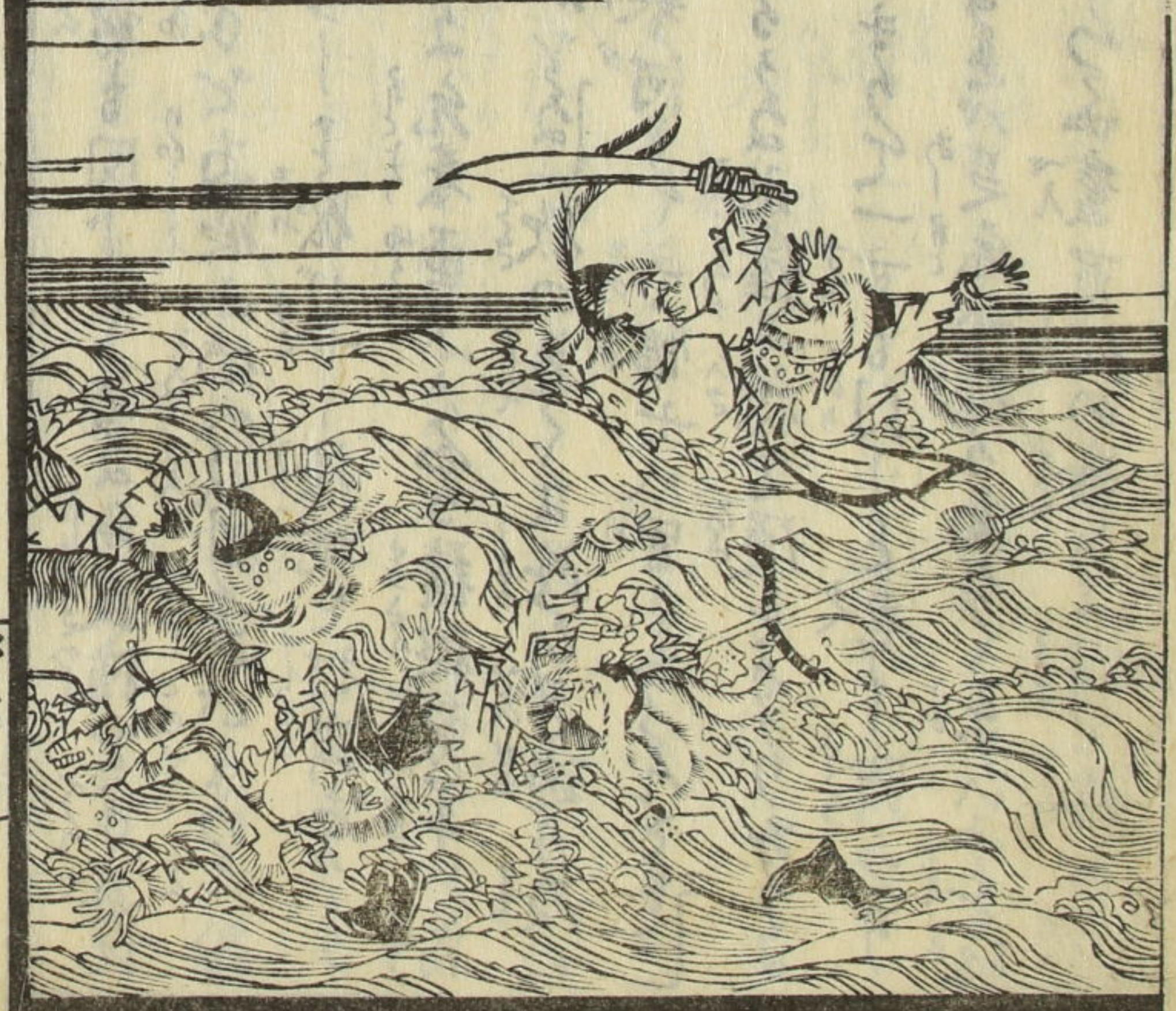
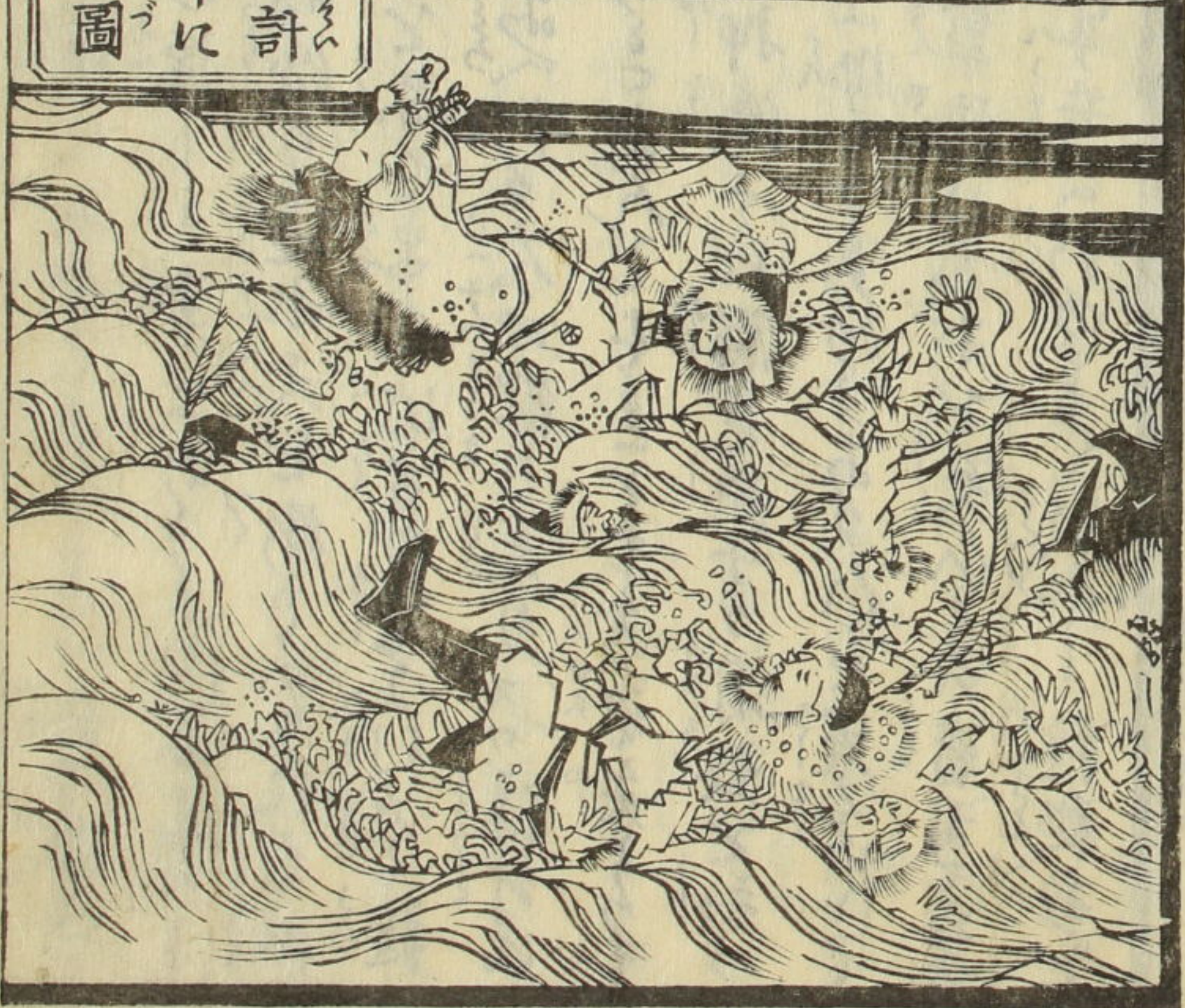
探死方と劬し戦ふ又地雷大堆發却合十餘ヶ所の地
雷大に廣野にづく大は敵も大勢倍く職らるるばんと
種くおり人ども士卒糜爛して殺ふと社とに乱まきて敵
をそれども敵兵も大と踏てさうの社をさしり大筒を打
撃るのそ後間を化り勢とまめて城かゝ陣と又城の東北
より来る一々の難勢掃り掃り掃り攻勢は城各因づく
對敵し地戦終りて楯竹束と打捨て去捨と交へ挑むた
うらうの隊はゆるあは城各の出法し陣西の遠後ろよ九二
三十ヶ所の大なるを掃荒本とびく敵も掃さるるものり
難勢はとめて強しと思へども是を軍勢と難勢しし

あつた又決絶大煩のゆへありとも及へざらん赤くも尚
とらば是等のふり心も苗を勇と勵一切伏実休も痛く
血然せしうが敵者酒の難て一敷に近をる難勢をと濟て
鷲直下区蒐るむも坤の風烈く吹出るに彼二三十の
う稽の上より胡椒あつたの蕃椒の粉と散しく撒ちしを
難勢の西南小向つてをむぬ風とより右の粉撒あされ
鼻より入り入咽をり刺一目と用く幸能に忠勢服と
肩て一寸先の圍と敵者是と見るとあて起し突掛るを
難勢のぞゆつて右に左に敗をせ挽りとあつても司馬翼
く智勇無傍のおちるをく近ぞ行能勢と打揚る又敵

の西北より向ひ難勢も因どく是より牛皮指と子毎に
おせ難矢とせむと煩ふとあ浪小備へ故掛るにけいの大お
司馬苞も勇く深うして敵にサ一決絶と打掛るを
うり引に陣と起けし元来勇小を中難勢軍の孫
なるそをあくくと下知と後敵の起くは流ひは道のたの
経サ里計もをこし寒河とて幅七八里もあつんと後
さ大河あり不思後なるる水僅小孫を浸をたりかうよ
敵者河の才途小踏苗まりて一寸も引と起し幾ふり
大河のあらき河原をまは元小孫のあうく手ひふを返
自也と濟く起る起し子養万化の幾ひは時と後をけ



司馬翼の智計
 韃靼勢と川中に
 溺死せしむる圖



八ノ八

時城名も烈しく幾も守におぼと是しき一登の狼煙
閃くも揚りし共何の強しと幸もあつざりしふまの
こそあま川上へ鳴くと信後り逆水天と衝たり白波
きて落来る機勢の途と来ておくけ方の岩より引返る
組拾の程も軍とする西へゆく大水漲り来りス口係りに
落入りしと周章あつめと軍人とまきどもあつたより
くやろまは難勢はふ押流され溺れ死する者数と知
ど或はる別くして稀にゆるり何のあつひも岩とくして
遊と逆くもあまとも軍勢八九分と失ひし皆司る翼
しバ智係より出て三軍共のゆく收ふし難絶と
とく

五ノ九

矢あつても難ししりえれば毎ひ改る義勢攪ししは運ふ
陣とひけて惣務する木柵と結ひ逆方の要害とぬ
至三軍のおとと集めく評定をまきども後めてお給の
ゆと究むる者多く言と捲て款お司る翼しバ智係と
怖し一向もおと者多く度中あつりく入くくつや馬
兎軍を群と抽て中やう本國抗慶山の麓に麻辣接兎
まらと云一賢人ありそ成長は古中華の長高りし
りやふ舟しき葦廬ふ所と階め今北京の壽政と愚とて
閑居し羽衣の出ると結我軍のをまきと付く病成とな
るの義長ろまは楽と振るべ何ぞ居ん樂春らん大軍師

の橙と考うううのバ黒漆城を勿論海と校す北島と改至
 ううよ安ううんと速うれば客備客王ううんも速水喇嘛らま
 も大は好びふと拍く奇なり好らり子くそ麻練技思ま
 と後うんと馬見罕る小幣物と拍台速う抗廢山の麓
 へ頼うむ

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

韃靼勝敗記卷之一終

